

人間と文化

最終評価はシラバスに明示した評価方法に従った。

第 14 週に行った「評価」の結果はシラバスの「講義の概要」で述べられている内容がどの程度理解できたか、また「到達目標」にどの程度まで達したかの指標である。

履修中止者が去ったあとの受講態度は大変よくなったが、反面、講義のあとで e-class に提出する練習問題の解答には偏りが見られた。ほぼ毎回 1000 字を越える文字数で、注釈や参考文献を付した小レポートに近いものもあれば、たった 1 行のほとんど意味のない解答もあった。また、ほぼ毎回誠実に解答した学生層と、5 回以下の解答しかなかった学生層に分かれた。

知識中心の中間試験と、論理力や総合力を問う論述試験の二つの試験を課したが、試験の成績と、日々の努力を記録した練習問題の解答（の質と量）のあいだには十分予想されたことではあるが正の相関が見られた。楽をして高い評価を得ようとするのは幻想だ。100 歩譲って、単位を取ってうまく世渡り上手に就職できたとしても、ポスト・レマンショックのグローバル時代に基礎学力のない人間は知識基盤社会から退場する他ないことを早く悟ってほしい。

この講義では政治、経済、文化、メディアなどの多岐にわたる分野で用いられる専門用語を頻繁に用いるので、講義中に何度も指示したように、慣れない分野での専門用語は各種の事典等で復習に努めてほしかった。事実、指示を守った受講者は試験時に見違えるような理解力を示している。また、講義中に配布したレジメやシラバスで指示した文献を真摯に読んで学習した受験者と、この学習を怠った受験者の間には解答上で残酷なまでの差が出た。ただ単に講義に出席して座っているだけで期待される知識と論理力が身につけばそれに越したことはないが、現実には厳しい。

「評価」における論述問題は 13 週目の講義で説明したように、設問をよく読みどのような解答が期待されているのかをよく考えてほしかった。講義中に何回か言及したアントニオ・グラムシの「文化の覇権」であるが、説明を聞いて理解することができても、自分で主体的にこの概念を用いて文化現象を分析するのは意外に難しい。だが、第 1 回目の講義から文化について様々な角度から考察し、知識と思考能力を積み上げてきた受講者にとっては、逆にこの概念をもとに各自の文化論を展開すればよいので、今回の設問は易しかったはずである。事実、228（数字は学生 ID の下 3 桁；学年は特定していない）、255、077、の 3 つの解答は完璧で、教師としては脱帽である。067 の第 1 段落は素晴らしい解答で、結論部がもう少し説得力があれば完璧であった。281 は決して読みやすいハンドライティングではなかったし、分量も少し少なめだが、本質を捉えた解答で感心した。

「授業に関するアンケート」の自由記述で「中間テストが丸暗記だった」と書いた者がい

たのには驚いた。中間テストの前に丸暗記だと伝えたのだが、アメリカン・フットボールでも硬式野球でも複雑なルールを覚えていなければプレーヤーにはなれないだろう。実際2018年の日本のプロ野球の公式戦であったことだが、9回2死から「振り逃げ」という珍しいプレーで逆転劇が起こったことがある。丸暗記を批判して、ルールブックでルールを確認していたら、すぐキャッチャーにタッチされてアウトになってしまう。大学のような専門的な領域での議論をしようと思ったらそれなりの専門用語や概念を理解するしかない。

中間試験ではなく、論述問題で、番号は出さないが、「ロラン・バルト」のことを「アラン・ベルト」と書いたり、「ワラン・ベルト」と書いた実際の解答例があった。三菱電機の面接に行って「サンビシ電気」という人はいないだろう。1個1個の名詞を解答する中間試験と違って、論述問題で不正確な記述をすると信用度が大きく損なわれてしまう。

内容・質ともに貧弱なものは論外として、解答の中にはレジメの中の解説をただ丸暗記してほぼそのまま書き写したのものや、準備不足のためか文章の繋がりが非論理的になったり、そもそもパラグラフ・ライティングが出来ていないものもあった。また根拠のない思い込みや、調査や資料の読み込み不足のために客観性を欠く解答があった。

「文化的覇権」が正確に、また適切な例示を伴って定義されていることが大前提になるが、それに加えて以下の3点が備わっていれば合格だ。

- 1) 解答の内容が整理され、それぞれの内容が議論全体の中で論理的に関係づけられている。
- 2) 資料などから学習した内容に引用符を付けたりして、根拠なる学説を明記した上で自分のコメントを展開している。
- 3) 「現代の文化の諸相」の意味が適切に理解できいて、適切な例示を与えている。

文化の諸相の具体例について多くの受講生が2つ以上のアспектから論理的に文化の諸相を論じていて感心させられる解答も多かった。例えば、グラムシの「文化の覇権の概念を正確に定義し、この概念を用いて多文化社会における人種問題や北アイルランドの宗教対立の実相を浮かび上がらせた解答、リンチの都市論をよく理解した解答、オリエンタリズムからコロニアリズム、さらにそこから国民国家や多文化社会、さらにはメディアと情報の関係を浮かび上がらせた解答、ジェンダー、宗教、人種におけるヘゲモニーを論じた見事な解答もあった。

一方、政治的ヘゲモニーと文化的ヘゲモニーの違いが理解できていない解答も依然として多かった。テクノロジーとメディアを混同している解答も多かった。

深刻な問題がある。文化的覇権の例示として「学校でチャイムが鳴ると生徒が自主的に席に座る」と言った趣旨の解答が7名あった。ここで個人を特定はしないが、まったく同じ例が7件も同時に出てくる偶然の確率は極めて低い。過去4年間同じ現象が起きていて、これらの解答をした受験者の答案は共通してスコアが低いという特徴がある。日々の学習を怠り、藁をもすがる思いで飛びついた情報のレベルが低かったといことだろうか。

中間テストについては試験の翌週に講評を行ったので、ここでは詳しくは触れないが、配布した資料がさほど多くなかったにもかかわらず、資料にまったく目を通していない受講生が少なからずいたのは教師としても大きな反省材料である。もともと講義のシラバスを読んで知的興味を刺激されて受講した学生には不必要な、いやネガティブなサービスなのだが、勉強の仕方が分からないと不満を漏らす少数の受講生には有料の教科書を課すことも検討しなければならない。

最後にレポートについて簡単にコメントを記す。

本人は気づいていないだろうが、とんでもないミスで訂正せずに平気で提出した人がいる。「田口哲也」を「田中哲也」と3箇所も誤記している例があった。こんなレポートを読むのは拷問に近い。提出前にきちんと見直しておこう。ミスをなくするのは難しいが、見直すことでその量を減らすことができる。手書きではなくワードプロセッサを使ってよいのだから、例えば「ワード」のメニューバーにある「校閲」の機能をしっかり使おう。もっとも私のことを「田中先生」と思っている人にはつける薬がない。文化情報学部には言語学の田中先生がいるので、この種類のミスは「ごめんなさい」ではすまないのではないだろうか。

爆笑的な間違いとして「レクスロス」が「ソクラテス」になっていたのがあった。教科書を読んでレポートを書くのが課題だが、本当に教科書を読んだのか怪しい例が複数あった。出版元の「思潮社」を「思想社」や「潮朝社」と記述したレポートがあったくらいだ。

レポートというのは、時間制限のある一発勝負の試験は苦手だが、じっくり資料を読んで考えるのが得意な人のために設けた得点を取りやすい課題のはずであるが、いくら時間がなかったとは言え、一度も見直していない、あるいは見直しても気づかない程度の学習量ではそもそもレポートを書く資格がない。未提出者の潔さを見習ったらどうかというレポートが一通ならずあった。今後の戒めにしてほしい。

評価できなかったレポートには以下の共通した特徴がある。

- 1) 突然文体が変わる
- 2) 決まり文句が頻出する
- 3) 引用ができていない
- 4) 注釈や参考文献がない

つまり、ネット記事を纏めただけのものである可能性が極めて高い。

他方、しっかり文献を読み、引用や注、参考文献も明記したレポート (255、269、271)、詩を引用した本格的な論文に近いレポート (305)、きわめてオリジナルな意見を開陳しているレポート (197、216)、講義内容とレポートを見事に統合したもの (210、279、319) などがあった。この様な優秀なレポートを読むことができるのは教師冥利につきる。同志

社大学文化情報学部は勉強する学部だという自覚と誇りを持ったこれらの学生さんに敬意を表する。